

トッパセミナーから

問い直される人間観

オウム真理教と90年代日本社会

中西 新太郎 (横浜市立大学助教授)

私はオウムのウオッチャーでもないし、宗教学をやっているわけではありませんが、オウムの問題について若者がどんなことを考えているか、今の社会を考える時避けて通れない問題として、80年代の中高生たちがどんなものを読み、どんなことを考えていたのかをお話します。

学生たちがこれからどう生きて行くかといったときに、深刻な文化的な幻想が潜在的にあると感じます。オウムも一種の反乱だったと言う風に残る可能性もあり、また若い人たちの受けとめ方には、交通事故と変わらないレベルの受けとめ方もありうるのです。一人一人の死が社会的にみてそういうふうに使われ、個人個人にそのまま受けとられてしまう状況があるかぎり、オウムがいかにひどい団体かといっても通用しない現実が残ります。とりかえしのつかない社会的な事件というよりは、自分にとってどういう意味があるかだけをはるかに重要に受けとめる意識が問題なのです。

1975～6年から確立された企業社会の在り方、その20年間で出て来た人間観の特徴、とくにこの時期の文化を若い世代の人がどう受けとめてきたか見てみたいと思います。

事件をめぐって「異次元の世界のようだ」「他人の痛みを鈍感で想像力が欠如している」という受けとめ方と、「オウムがサリンをやったかなんて本質的な問題じゃないんだ」「今は少数派であるこういう層がふえていたらどうなるかということが興味深い」というとらえ方が価値観として対照的にせめぎあっていて、オームの中で出てきた人間観はおかしくないという価値観を一方で広げる役割をしている。人間観にかんする深いところでこの矛盾にオウム真理教事件がひっかかっているのです。

1970年代にはそういったかたちのせめぎあいは顕在化していなかった。企業社会システムが確立してくる中で、戦後民主主義といわれる社会の在り方、そこで想定されていた民主主義とか討論とか自由といった規範、理念についての共通理解がとりくずされた。1990年代その姿があからさまにでてきたといえます。

1975年に10歳前後を迎えている世代は80年前後の校内暴力や80年代半ばのいじめの現象を経験した世代です。企業社会の能力主義的な秩序が子どもの成長の場面まで含めてわたしたちの生活の全域に影響を及ぼすようになり、とりわけ教育の場面で影響は深刻に現れた。1970年代後半から80年、日本のGNPはあがり日本は経済大国といわれ「豊かな社会」が出現した。もちろんその豊かさにはしっかり格差があるのですが、経済的に未曾有の豊かさを実現したといわれる。ところが若い人がその時代を楽しいと実は感じていない。自分たちの人生を一元的な尺度で測られるうらみつらみを子どもたちは内面に蓄積してゆきます。自分たちの生活の出口の見えない矛盾を若い世代が感じています。大人が（教師も運動をして来た人も含めて）そのことに自覚的だったかという、わたしは疑問をもっています。

若い人の中でベストセラーになった赤川次郎の本を200冊ほど読みましたが、その特徴は「現実是不変な、自分をどう変えるか」です。下重暁子さんの若い女性へのインタビュー記録のなかでも、「自分を磨いて今の社会の中で生きられるようにしよう」という姿勢が特徴的です。80年代の若い人の文化の中で共通する、「自分の在り方を変えるしかない」という考え方は、積極的であ

るとともに大きな問題をふくんでいます。若者風俗として見過ごされてきたが、80年代のサブカルチャーのいくつかの要素の中には、私たちがこれまで常識だと思ってきた価値観や人間観が少しずつずれていく、地殻変動が起こっていたのではないかと思います。そのことを考えるとオウムの問題は深刻です。マンガの「アキラ」「北斗の拳」「ドラゴンボール」など——後の二つが載っていた『少年ジャンプ』は450万部発売されていた。10歳から25歳のほぼ全域をカバーしているすごい数です。——こういったものをみていくと、たとえば「鉄腕アトム」は善人、悪人がはっきりしていましたが、80年代のものは、時に悪のほうが非常に魅力的に書かれている。善と悪の境界が80年代半ばからはっきりしなくなり、何が善で何が悪かを既存の建前に従って判断しようという姿勢が、特にサブカルチャーの中ですっかり失われてしまった。残酷シーンがどうのという以上に、もっと根本のところでもわたしたちが良いことと悪いことと分ける区別が、ほんとうにそうなのかと問い詰めた時に確信があやふやになっているといえます。

手塚治虫の「ブラックジャック」は人体改造を扱いながら、生命とはなにか、生と死の意味をヒューマンイズムの枠内で考えていた。「ドラゴンボール」の主人公は何度でも生き返る、繰り返すたびに敵が強くなる。生死をそうやって気軽に転換させる話はたくさんあります。文化的にみて生と死の境界がゆらいできているといえる。まんががそうであるからというより、これは中絶や脳死をめぐる議論に示されているような現実を反映しているといえます。

「命をうばったらだめ」という、常識だと思っていたことが少しずつ違ってきていることを見ておかないといけない。生と死の境界がゆらぐということは、人間の見方がゆらぐということですからまるっきり違ってしまいます。

かって教育現場で子どもたちの体について、言われたとうりしか動かない、体そのものを自分でコントロールできないなど、子どもの体と外界との関係が変わってきていることが80年代さかんに

いわれました。自分の身体が現実に生きていて、生きている外界と肉体的に接触するというのとはどういうことか、その実感がもちにくい。子どもたちと私たちのもっている感触とは別物になっているのかもしれない。自分の身体があやふやなら、他者の身体はもっとあやふやになります。

生と死の境界がゆらぎ、身体が何であるか確信がもてない状況で生きている現実をふまえて私たちはものを考えなければいけない。そういうあやふやさを乗り越えようとすると、超能力とか、強い自己に変化するというシナリオを描くことになる。企業社会の能力主義秩序からいっても、より強い人間の方がより大きなメリットを受けられる。弱さより強さのほうが称賛される。自分のあやふやさを克服していくためには、自分をいかに強くするかという問題の立て方をせざるをえない。

強い自分になろうと考えたとき、他の人間にたいする配慮や弱さは消えてしまう。強さを追求していくと弱さは克服されるべき資質であり、克服されるべき性格の対象で、弱さはなるべく社会の中に存在しないほうがいいということになる。自分を強くしたいというのは、自己肯定ですからそのかぎり非常に大切な要素です。しかし、自分を肯定することが自分を強くするしかないというワクができています。80年代社会はそういうワクを作ったと私は思っています。

いじめの構造にしても、当面の加害者を排除したらいじめがなくなるというのは絶対ない。強さを追求していくことで、自分を肯定していくすじみちが社会的に当然の前提となり続けるかぎり、人が変わってもいじめは必ず残ります。学校だけでなく今の社会の中で、自分を確立する道筋が自分を強くする方向にしか向かわない状態があるから、これはそう簡単に解決しない深刻な問題だと思います。能力を基準にしてあらゆる関係を測っていくことになると社会の弱い部分を排除して、完璧に強い人間になるかしかない。人を蹴落とすことなく、自分のペースでできることを主観的に

望んでいても社会がそれを許さない。

近代資本主義社会は人を評価するにさいして、能力という形で社会的に確認する以外に他の道筋が作られていないと私は思います。能力は個別に測るもの、個別であるから差ができる。「お互いの関係が大切」とか「民主主義」とかいってもそれを「実現してくれる世の中ですか?」と問われたらそうだとはいい難い。だから若い世代にとって、多数の力で自分を押し潰す民主主義は憎しみの対象になりかねない。この能力観を越えていかなければならないが、残念ながら今の社会では簡単にできない現実がある。近代社会でずーとつくってきたものであるから、そう簡単に組み替えはできない。そう簡単には突破できない困難に、企業社会の抑圧を体感した若い世代は直面している。だからこんな社会はいやだと思いはじめるところに深い矛盾があります。

個々に宗教に入ったりして解決する人もあるが、社会的に解決する問題として考えた時、今までとは違うものさしを、長い時間がかかるが少しずつ表にだしていかなければならない。その作業が文化的課題でもあるし、社会的課題としてもつきつけられていると考えています。

オウムの問題はこういうことを明らかにしたいといえます。

70年代終わりにでてきた日本の社会のありようをどこでどう変えるか、それを私たちがどう引き受けるか。今までの常識と思っていた関係をどういうふうにつくりかえていけるかを大人の社会がみせる必要である。それがオウムにひかれる若い人たちに提出しなければいけない回答ではないかと考えます。他者とのつながり、横にいるつながりをさまざまな社会関係の中で目に見えるようにしていかなければなりません。

90年代にはいってはいっきりしてきた企業社会体制のゆらぎ、リストラや雇用破壊の状況を見て、若い人はこの社会は続かないかもしれないと思い始めている。良くなるのではなく大半は悪くなると考えている。別の道、変えようがないとおもっ

ていた現実とは違う道、生き方、仕事、そういうものが社会的にみえていけば80年代と違った社会変動が若い世代の中でおきる。今までもっていた人間観を若い人たちがもはや共有していない。友達との付き合い方、他人、親、家族についても私たちがもっているのとは違う感じ方をしている。こういう現実をふまえながら、企業社会の秩序とはちがう別の道を追求する、社会的なものにしていける運動の場や仕事の場をつくっていくことが大切なのではないかと思います。

(文責・まとめ 編集部)

■トップセミナーは、7月30日～8月1日の3日間、熱海において日本労働者協同組合連合会の主催で行われました。この記録はセミナーの一部を収録したものです。

オウムがマスコミに登場しない日はない状況ですが、一連の事件に横たわる社会的な問題を浮き彫りにした、岡田・中西両氏の講演内容をとりあげました。

当日の講演をもとに、編集部の責任でまとめたものです。